

連休明けの5月の日曜日、「本條秀太郎・鄙哥／伝えゆく詩達」を聴きに行った。邦楽には詳しくないのだが、本條秀太郎さんは従来の「三味線や民謡」の枠を超えて活躍している音楽家。民謡、端唄、そして俚奏楽という自ら作り上げたジャンルの三味線音楽の3本立てで活動している人だという。

この日のプログラムは「地方座敷唄」と「地方唄」の二部形式。幕開きと同時に岩手の釜石浜唄、宮城の塩釜甚句などが続く。確実に響く高めの三味線の音と、本條さん自身の体の奥から出てくる思いのこもった唄に惹きつけられた。三味線や唄が大好きなのだろうし、好きを超えた使命感すら感じさせる。

披露される唄のほとんどは、採譜と編曲を本條さん自身がおこなっている。たくさんの地方唄を演奏しているも、必ずしもその地域で勉強したとは限らないと彼は言う。そしてその必要もないのだ、と。

「私は茨城の潮来で生まれ育ちました。普通は採譜というと、現地へ赴いて勉強するんですが、それは結局ただのコピーになってしまう。むしろ、その地出身の人の唄をじっくりと聴き、自分の体を通して自分の曲にして



## 粹への道は(24) 遠けれど……

1960年東京生まれ。明治大学文学部卒業後、フリーライターとして活動を始める。『人はなぜ不倫をするのか』など、男女関係に関するノンフィクションや官能小説などを執筆。時間があると寄席や落語会へふらふらと。

## その地で歌い継がれる

### 唄たちのために

亀山早苗

いったほうがいいと思うんです」

その地で歌い継がれてきた小さな唄たちは、おそらくその地の「生活」そのものから出てきた唄。その当時の人の思いや原曲のありようを感じながら編曲をしていくようだ。

曲の合間に本條さん自身がそんな話をしながら、会はず心地よくゆったりと進んでいく。

生まれ育った潮来には芸者衆も多く、小さいころから三味線には慣れ親しんでいた。本格的に習い始めたのは11歳のときで、地元では「天才少年」と賞賛された。長唄、清元、小唄端唄といろいろ学び、中学生に

なるときに上京。高校卒業と同時に、初代・藤本秀丈（むらもとひでお）に師事。藤本秀丈は数種の三味線を弾きわけ、それぞれで第一人者として知られている。

そこから飛び出して本條流を作ったのは26歳のとき。以後、映画や舞台で音楽を担当したり、現代音楽とコラボしたり、欧米やアジアで演奏したりと世界中で活躍してきた。そんな本條さんは著書『三味線語り』（淡文社）で、「私は今の安易にアレンジされ商業ベースにのせた民謡ではなく、民謡が創作された最初期の姿に興味をもっています」と書いている。鄙哥の会でも、彼は何度

かそう話していた。「伝統」は、最初の新鮮な感覚を保ち続けた上で、新しい風を吹き込むことが大事である、とも。そしてそれは、禅宗でいう「伝燈」（お釈迦様が心の闇を照らす真理）とも通じるものがあるとしている。

5月の会で、本條さんは親しかった人と彼自身の師である藤本さんの亡くなった日が年は違えど同じ日だったと話しながら言葉を詰まらせた。三味線も唄も、奏でるのは人、思いをつなげていくのも人。彼の心の中にある「人への熱い思い」が垣間見えた瞬間だった。